

「子供の頃の夢は何でしたか？」

世代を問わず共通の会話を見つづける緒になるこの言葉。子供の頃の夢には日本エンタメを活性化させる大きな可能性が秘められている。

一昨年、地方創生が注目される中、私はある地方自治体へ活性化の企画としてダンス教育の提案をさせてもらった。差別化されたその自治体の特徴を抽出したところ市内に1校だけの高校のダンス部が全国大会に出場し高校生の間でダンスが流行っていることが分かった。更にダンスが小中学校で表現運動として義務教育化された事もあり年々そのレベルも上がってきたという。

企画実施前に高校のダンス部部員数十人に将来の夢を聞いたところダンサーと答える生徒は皆無だった。高校球児がプロ野球選手を夢見るようにプロのダンサーを夢見る部員が居なかったのは何故か？そんな疑問も生れながら私は日本国内屈指のダンスグループを臨時講師としてダンス部の特別授業を行うことを決めた。

そして当日、プロのパフォーマンスを前に感動し涙する部員やその指導に熱心に耳を傾ける部員の姿がそこにはあった。また講師は部員の全体的なレベルの高さに驚き一部の部員の特出した才能に気付くそれをその部員に伝えていた。終了後、数名が講師に駆け寄り

## 『夢になる日本エンタメを考える』～子供の頃の夢は何でしたか？～

文 岸本公平 text by Kouhei Kishimoto

同じ意図の質問をしていた。それは、どうすればプロになれるのか？ダンスを続けるにはどうしたらいいのか？といった意味合いの内容だった。

事前の聞き取りでは想定されなかった部員の変化は何なのか？それは特別授業の前はダンスというエンタメに日々触れながらもダンスを自身の将来の姿に重ねる現実味が無かったが、プロの姿を目の当たりにしダンスを生業にする姿にこれまでに感じる事の無かった現実味を実感したからに違いない。

ダンスに限らず、その後行ったDJやドラムなどのエンタメでの同様の取り組みでも変化が見られた。

子供たちへの多様化された習い事やワークショップなどからそういったエンタメとの接触の機会は確実に増えてきている事は間違いない。

子供の特出した才能を親と子供だけで気付く事は不可能ではないだろうか？また発掘された才能に将来への現実味を持たせる事も機会に恵まれなければ難しい。

子供が現実味を実感しそれを「夢」として情熱を傾けられる環境がより整えば日本のエンタメは更に底上げされる事は間違いない。



### Profile

株式会社NEWTRAL代表取締役  
HANABIプロジェクトプロデューサー  
福岡県出身。日本大学中退後、テレビ番組制作会社入社。その後ディレクター、プロデューサーなどを経て、30歳の時株式会社NEWTRALを設立。メディアで学んだ企画やプロデュースの視点を生かし、企業のコンサルティングはもとより、地方創生事業やクールジャパン事業に取り組む。